

公益財団法人 日本クリスチャン・アカデミー機関誌

はなしあい

題字 元総理 片山哲 筆

2020年5・6月号

発行編集人

公益財団法人 日本クリスチャン・アカデミー
代表理事 中村 信博

発行所

日本クリスチャン・アカデミー
京都市左京区一乗寺竹ノ内町23
075 (711) 2147

NIPPON CHRISTIAN ACADEMY

第614号

三〇数年ぶりに、アルペール・カミュ『ペスト』を再読した。最初に読んだときも、登場人物一人ひとりの個性を繊細に描き出すカミュの文学的技巧と、それを支える思想的深さに圧倒された記憶があるが、アルジェリアのオランという都市がペスト拡大に伴って封鎖されたという物語そのものは、どこか遠い世界での出来事のように思えた。それゆえ、『ペスト』を、この世の不条理や、人の苦難や死の隠喩(メタファー)として読んでいた。

ところが、新型コロナウイルスの感染拡大によって刻々と変化する社会情勢を感じながら再読する中で、同じ小説がまったく違うリアリティをもって迫ってくることに驚きを禁じ得なかった。オランで起きていることが酷似しており、不条理のただ中に置かれたときの人間心理は、時代によって大きく変わるわけではないことをあらためて認識させられた。私にとってペストは隠喩ではなく現実のものとなった。

とはいえ、カミュは、ペストを人の外部から身体に侵入

してくる感染症として描いているだけでなく、それが隠喩として人間の精神や社会の中に巣くっている有り様をも語っている。登場人物の一人タルーにとって、ペストとは死刑宣告(制度)のことであり、人間に死をもたらすという点では、ペストも死刑宣告も何ら変わりがない。だから、タルーは死刑宣告や殺人(戦



パンデミック時代の信仰

財団評議員

小原 克博

争)を嫌悪し、その隠喩的な意味でペスト患者になることを拒もうとする。しかし同時に、この世界の誰もペストからは逃れられないという認識に至るのであった。

時代の不条理のただ中でありながら、人間がいかにそれに抵抗し、自由であり得るかをカミュは問うている。カミュと同時代に生き、同

中で、「われわれは——《たとえ神がいなくとも》——この世の中で生きなければならぬ。このことを認識することなしに誠実であることはできない。そして、まさにこのことを、我々は神の御前で認識する! 神ご自身が、われわれを強いて、この認識にいたらせたもう」と記した。

カミュとボンヘッファーのおそるべき近さをどのように受けとめたらよいのだろうか。『ペスト』の主人公とも言える無神論者の医師リ

ウーが、見解をまったく異にしながらも、ペスト最前線と共に戦う同労者のパヌルー神父(彼はペストを天罰として語った)の手をとり語りかけた、冗談めいた言葉が妙にこだまする。「神さまだつて今や私たちをひき離すことはできませんね」。医療と宗教という異なる領域のすれ違いと邂逅が、新たな神認識を強いている。

ポストコロナの時代を迎えたとしても、次のパンデミックが待ち構えている。グローバルな人口移動・人口集中・人口増加・自然破壊が続く限り、パンデミックが途絶えることはない。その意味で私たちはインター・パンデミック時代を生き続けなければならぬ。「中間の時間」をいかに生きるかは、キリスト神学、とりわけ終末論にとつて重要な問いであり続けてきた。『ペスト』を再読する中で、偶然にも、カミュとボンヘッファーの「中間」に立たされている自分自身を発見することになった。パンデミックが人間社会にもたらした、現実的かつ隠喩的な意味を問う作業を始めなければならない。

(同志社大学神学部教授)